

保育者になる学生が小学校各学年の図工教科書の図画を描く(2) : 保幼小連携を考えるきっかけとなるプログラムの振り返り

著者	木谷 安憲
雑誌名	川口短大紀要
巻	32
ページ	165-176
発行年	2018-12-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00001199/

保育者になる学生が小学校各学年の 図工教科書の図画を描く（２）

—— 保幼小連携を考えるきっかけとなるプログラムの振り返り ——

木 谷 安 憲

I はじめに

本稿は、保育者養成校で造形を教える教員として学生に保幼小連携について考えるきっかけとなるプログラムを作り、その可能性を考えた研究「保育者になる学生が小学校各学年の図工教科書の図画を描く——保幼小連携を考えるきっかけとなるプログラム——⁽¹⁾」の続編である。前稿では、色々な要素がかけ合わされているこの図画紙芝居プログラムをグループで行う意義や、自らの体験を通すことが子どもを理解するきっかけになりうるということが明らかになった。しかし、学生の感想の省察ができていなかった。本稿では書かれた感想について分析し、前稿では明らかにできなかった可能性について探っていきたい。

II 想像力について

学生が、小学校図工題材の絵を描くためには、想像力が鍵になるのではないか。鷲田清一は、想像力を「ここにあるものを手がかりとして、ここにはないもの、つまりは不在のものをたぐり寄せる、あるいは創り出すという、精神のいとなみ⁽²⁾」と定義している。そして、「想像力とはいまここにはないものをおもうことだとすると、それは人間のもっとも基本的な能力であるといえる。未来への希望や期待も、過去の記憶も、まだないもの、もうないものを現在にたぐり寄せるという意味では、想像力のはたらきである⁽³⁾」という。小学生という自分にとっては過去の時間を感じながら、保育者になった未来の自分の視点も生まれてくるこの図画紙芝居プログラムは、まさに想像力が必要な活動になる。

さらにいえば、保育者は子どもたちの絵を見る立場である。絵という現物があっても、描いている途中の試行錯誤を全部見ることはできない。ましてや描いている時の子どもの気持ちは見えない。保育者が子どもの気持ちを汲み取るためには、どうしても想像力が必要になるのだ。

「想像力のスイッチを入れよう」というタイトルの特別授業を、全国三ヶ所の小学校で行った元 TBS のアナウンサーである下村健一は、これからの人間社会をハッピーに生きていくために必要な想像力が3つあるという。「他者に対する想像力」、「情報に対する想像力」、「未来に対する想像力」である⁽⁴⁾。この図画紙芝居プログラムは、子どもに対する想像力、児童の発達における情報に対する想像力、子どもがこれから生きていく未来に対する想像力をも必要としている。それは、下村のいう3つの想像力とも合致している。

子どもの想像力についてヴィゴツキーは、「想像力による創作活動は、人間の過去経験がどれだけ豊富で多様であるかに直接依存して」おり、それは「過去体験が空想を構成する素材を提供しているから」であり、「人間の過去体験が豊かであればあるほど、その人の想像に資する素材も多く⁽⁵⁾」なるのだという。だからこそ子どもたちには豊かな体験をしてもらいたいし、保育者は子どもたちにそのような体験をさせてあげたいと思う。

砂場で遊んでいる3歳児が、砂のお団子をつくっている様子を、内田伸子は見ている。「やがて一人の子どもが、『先生、お団子どうぞ』と、そっと受け持ちの保育者にさしだした。先生は「ごちそうさま」と心をこめて言い、食べるまねをした。さらに、『ああ、美味しいこと。クリームの味がしますね』と言ったのである。もう一つのクラスの子どもも、自分の受け持ちにやはりお団子をさしだした。『ごちそうさま。おいしいこと』と同じように心をこめて礼を言った⁽⁶⁾。しかし、その後の子どもの行動はまるで違ってしまったのだという。最初のクラスの子ども達は、「その後、『今度はレモンの味』『いちごの味』『きなこがついてんの』とヴァリエーションを次々に考えだしては先生に差し出した。さらに、水に砂を混ぜて『コーヒーです。いっしょにどうぞ』などと、レストランごっこへと発展させていったの⁽⁷⁾」だそうだ。しかし、「もう一つのクラスでは、相変わらず『お団子どうぞ』とくりかえし、たくさんつくることを競ったり、砂場の縁にいてねいに並べる遊びになっていた⁽⁸⁾」のだ。2人の保育者の差は、少しの想像力の差であろう。しかしその差が、子どもたちの遊びの展開を変えていったとしたら、決して小さな差ともいえないのかもしれない。そして、その差をつくったものが保育者それぞれの体験であるとするならば、保育者養成校にいる我々の責任も重いといえよう。

Ⅲ 研究の目的

平成30年度より施行されている幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領には、育みたい資質・能力として、豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」、気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判

断力、表現力等の基礎」、心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」の3つが明記されている。これは、小学校の学習指導要領になると、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」という表記になる。

本研究の目的は、この図画紙芝居プログラムが、育みたい資質・能力である「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」に対して、どのように関係しているかを学生のアンケートから探っていくことだ。それぞれの学生によって感じ方が違う部分もあるだろう。共通しているところや傾向と呼べるものがあるのかもしれない。その上で、保育者になる学生が保幼小連携を意識するためのポイントと身につく力を整理していきたい。

Ⅳ 研究の方法

1. 対象

本学こども学科に平成29年度に入学して、後期より木谷ゼミに入ってきた10名のうち、図画紙芝居プログラムで、作品制作・紙芝居実演・振り返りの3日とも出席した8名。

2. 方法

1日目、各学年の絵（1年「できたらいいな、こんなこと」、2年「えのぐじま」、3年「ふしぎな乗りもの」、4年「へんてこ山の物語」、5年「春を感じて（今回は「季節を感じて」に変更した）、6年「感じたままに花」と自画像を描き、紙芝居実演後のアンケート（①～⑦）と、3日目振り返り後のアンケート（⑧⑨）を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」などに分類しながら分析する。

Ⅴ 学生の感想と省察

1. 学生への質問と感想

① 「小学校の図画で印象に残っていることは何ですか？」

A「版画・校舎の絵を描いた。ひまわりの絵を描いた」、B「写真会で神社の絵を描き入賞しました」、C「版画。大変でしたがとにかく楽しかったのを憶えています」、D「ゴーヤ、校庭、版画」、E「自分のオリジナルの世界を描いて、好きな人や友達を描いたりしていた」、F「春、さくら、つくし。秋、きのこ、たけのこ、おちば。冬、雪」、G「のこぎりで板を切って小さな棚つくったり（これ金賞とりました～☆）、粘土で何かつくったりした。なんか小2から小6まで選ばれて賞とった（てんらんかい）」、H「自分の顔を描いたこと。学校にはえている桜の木をかいた」

学生の回答で多かったものは、学校の周りなどの風景（5名）、版画（3名）、顔（2名）などである。賞を取ったことが嬉しかったという学生も2名いた。版画が多いのは、地道な作業をして刷った後で完成版画を見た、という達成感を味わえたからかもしれない。

② 「この活動の感想を書いて下さい」

A「小学校の教科書をもとに作品を描いてみて、大人になると小学校の教科書にかいてあるお題は難しかった。小学生はきっと直感で描いていると思うけど大人になると構成を考えてしまう」、B「制作をしていると、食べることも忘れてしまいそうになるくらいに没頭してしまうんだと感じました。小学校の頃を想像して描きましたが、昔すぎてなかなか思い出せませんでした」、C「年齢（年生）があがっていくごとにテーマや使うものも全然違うことに改めて気づきました。描き込む度合いも全然違いました」、D「6枚も描くなんてネタ切れしてしまう！と思っていましたが、なんだかあっと言う間に終わってしまいました。すべての絵に私らしさが出ましたが、同じすぎたかなという反省点もあります。でも久しぶりに水彩ができて楽しかったです」、E「小学生の絵の課題は、自由に描いたり想像したりする幅が広がったので、考えるのに少してこずりました。(笑)」、F「年齢に応じて子どもが考えること、表現すること、またその表現の仕方、筆や色の使い方の違いを理解した上で活動の内容を設定することの重要性を改めて感じることができました」、G「この活動を通して言えることは、絵を描くことが楽しかった、ということです。時間が苦じゃありませんでした。」、H「小1年から6年までやることで描き方の特ちょうや色づかいを学べた」

ここには、2つの傾向の答えがある。描いた自分に焦点がある主観的な回答と、小学生の題材についての発見等を書く客観的な回答である。主観的な回答は、B、D、Gの3名である。いずれも楽しかった、没頭したと答えている。保育者になる学生としては客観的な回答の方がいいのかもしれないが、表現に関する科目だからここのように主観的に感想を書くのも悪くないのではないか。自分の感覚を明らかにすることで、子どもたちの気持ちも想像しやすくなるのではないかと考えるからだ。もっとも、主観的な感想と客観的な感想を同時に持つことができるとよいのかもしれない。次回活動をする時には、そういう心構えで臨むように伝える必要があるだろう。

③ 「実際の小学生の頃と今とで、描いている内容が共通したところはどこですか？」

A「色ぬりの仕方(?)」、B「描くことが好きであるという事」、C「描くもの」、D「小学校の頃から絵は好きで色使いも多かったと思います。特に共通しているところは細かい色の組み合わせと、水でのぼしたがることです。ベタッと濃くぬってしまうと失敗が怖いのでその頃から水でのぼしてキレイに見せようとしていました。色の組み合わせとして、青+赤という簡単なものではなく、作った色+作った色で、その時しか出せない色をぬって、深みのある楽しい絵にしようということが共通していました」、E「なんとなく小さいころかいていたような絵を今までも似たような感じでかいている気がした」、F「広い範囲を同じ色で(水彩えのぐ)ぬるとき、色にムラができてしまう。物を描くときわくから書いてしまう」、G「表現の仕方」、H「色々な色を使っている」

これ以降の回答は、育みたい資質・能力の3つのうち、方向が近いものに分類していき、その内容と分類について考察していく。どうしても複数の領域に股がるものは、複数記入する。

③の回答の分類である。「知識及び技能」は、A, F, 「思考力, 判断力, 表現力等」は、C, D, G, H, 「学びに向かう力, 人間性等」は、B, Eとなった。ここでいう共通した部分というのは、元々自分が持っているものだ。成長して大人になっても、変わらずに自分が持っているものである。知識及び技能に分類したAやFの色に関することは、身体性と関係があるかもしれない。枠から描いてしまうのは、身体の癖なのか思考の癖なのか、判断は難しい。半数を、思考力, 判断力, 表現力等に分類したのは、絵を描くことが表現だからである。考えて、判断して、表現する、の連続だ。Dの、深みのある楽しい絵にしようということは、小学生なら考えていてもおかしくはない。文章にも深みを出そうとする姿勢が表れている。学びに向かう力, 人間性等は、今回は、絵に取り組む姿勢ともいえよう。いずれにせよ、ここに回答されていることは、その学生の芯に残っているものであると考えられる。

④ 「実際の小学生の頃と今とで、描いている内容がちがうところはどこですか？」

A「大人は決められた色をぬるが小学生は思った色をぬる。小学生は自分の世界をもっているが大人は周り共通の発想だと思った」、B「小学生の頃は、もっともっとずっと真面目に真剣に課題について考え、描くにしても、下書きをし、試行錯誤をくり返し、色もじっくり作ったので、時間で終わらなかった。今は、比べると、まייっかの精神」、C「色々な色を使うところ（作ったりして）」、D「違うところはやはりグラデーションや色の重ねなどを使う事です。様々な色を作ったとしても私はそれを重ねたりはしませんでしたし、グラデーションもできませんでした。今は油絵の癖で重ねたり、グラデーションも青→水だけでなく、桃、黄を入れたキレイなグラデーションを使うようになっていきます」、E「色の使い方の工夫が大人になるとされる気がしました。細かくいろんなものをかけるようになった」、F「角度や遠近法などを気にするようになった」、G「描くものが頭に浮かんでいる」、H「想像力が違う。色あそびができるようになる。細かい絵が描けるようになる」

④の回答の分類である。「知識及び技能」は、C, D, E, F, H, 「思考力, 判断力, 表現力等」は、A, G, 「学びに向かう力, 人間性等」は、Bとなった。知識及び技能に分類された学生が多かったのは、発達とともに知識が増え技能が高まったからであろう。また、思考力, 判断力, 表現力等に分類したAの、大人は決められた色をぬるが小学生は思った色をぬる、にしてもGの、描くものが頭に浮かんでいる、にしても知識及び技能的な側面がある。大人になるにつれ、知識や情報が増えた結果の表現だからだ。そして、知識や情報が増え経験が増えることで、想像力が育まれる。学生達もここは成長に自信を持っていいところだ。Bのいう、まייっかの精神は、自分の持っている力を的確に判断できる力がついてきたから獲得できたものだ。真剣に取り組み、試行錯誤した上で出した結論である。ここには、深い学びがあったと考えられる。

⑤ 「この制作をして気づいた点、学んだこと、よかったことをあげてください」

A「この制作をして、小学生と大人の発想のちがいにおどろいた。小学生の方が独特な描き方や発想を持っていることに気づいた。お題を出されて構成を考えてしまうのが大人だと分かった。ゼミの人たちの絵を見て良かった」、B「気づいた事は、イメージした色を作るのが下手だということと、せっかちになり、色をきちっと確認する前に、もう作品へのせている事が多いという事。また、パレットの使い方が大胆過ぎて、すぐにパレットが全面汚れてしまう」、C「絵のテーマや描き込みの度合いの違いなどに気付いた。6年生くらいになると色も多くなっているように感じた。絵も一緒に成長しているんだなと気付いた」、D「この制作をして、小学生のときこんなのを描いていたな、もし同じ題ならこんな工夫でできなかったな、立体感なかったな、と気づきました。年をとってたくさん学ぶことで色使いや絵の描き方、セッティングなどを知っていたのだと学びました。また、小学生だからといって、絵は単純でないことを知りました」、E「教科書で小さい子のアイデアなどを見てみると、本当に今の私たちじゃ気づかないようなものを絵にされていて、とても面白いなあと感じました。久々にたくさん絵を描いてみて、子どもの頃にひきもどされた気がして、小さい頃の感性が戻ったように感じました。」、F「この年齢は自分の考えた夢や空想を、絵の具をつかって、おもいおもいに描くことがねらいであり、またこの年齢は写実的なものも含めて描き、色をませたりなどの工夫をすることがねらいだ。などと、年齢にあわせたねらいと活動が設定されていることがとても重要だということに気付きました」、G「学年ごとにこんなことを、やらせれば良いんだ。こんなテーマがこの学年には合っているんだということが分かった」、H「小1の想像力の豊かさが年を重ねるごとに現実的になっていくことを学んだ。年が高くなっていくにつれて描く題も複雑になっているなど一度にやることでわかった」

⑤の回答の分類である。「知識及び技能」は、B、「思考力、判断力、表現力等」は、A、D、「学びに向かう力、人間性等」は、B、C、D、E、F、G、Hとなった。ここでの回答は、学びに向かう力、人間性等に分類されるものが最も多かった。気づいた点、学んだことを聞いているので、そうなるのだろう。

辻政博は、4歳前後から10歳前後を図式的な表現の段階といい、子どもの描画は写実や写生ではなく、自分のことを絵でもって思い浮かべて考える、子どもは絵によって考える、考えの中に取り入れなければならない要素を全部描く⁽⁹⁾、という。それに対して、10歳前後から12歳前後を視覚的な表現の段階といい、見えているものだけを表すのではなく、意図的に画面を構成するようになってくる⁽¹⁰⁾、という。これを基準に考えれば、Aの、構成を考えてしまうのが大人、というのは10歳前後から始まることになる。そして、一度構成を考える自分になれば以前のように戻ることは難しい。Hの、小1の想像力の豊かさが年を重ねるごとに現実的になっていく、というのは発達段階が影響している。

高学年では、対象をじっくり見て具体的に表す観察画が多くなる。天形健は、「観察力、認識力の高まった高学年で改めて題材としたいのが『人物画』である⁽¹¹⁾」という。また、風景画に対しても、「高学年の児童の多くは、空間に対する認識が高まり、周囲の環境を三次元的にとら

えることができるようになってきている⁽¹²⁾」と述べている。どちらも、客観的な要素が多くなってきている。

自分の絵を見ながら、また考えて描き、描いたものを見てそれと会話するように描き、描きたい要素をみんな描いていく、という図式的な表現の段階は終わっている。このような視点で見ると、学生達は描いて実感した後に児童の発達段階を学び直すことが、学びを深め、知識を増やすいい機会になっていたことが分かる。

⑥ 「保育者になる者として役に立ったな、と思うことはなんですか？」

A「幼児だけでなく小学生の発想や教科書の絵を見て、発想力が沸いた。小学生がどのような絵をかいているのかが分かってよかった」、B「役立った事は、スピード勝負の中で、出来そうという事です」、C「どういうテーマがどういう年齢に適しているかなど知れたので役に立った」、D「保育者として絵を描くこと、教えることを考えながら絵を描けたので役に立ちました。小学生向けの1～6年生の作品を見ることで、どんな絵を描いているかも知れましたし、参考になりました」、E「今回のような体験をしておけば、子ども達に教えてあげる時に少しでも子ども達の気持ちになってアドバイスすることができたり、考える機会も広がるので、とても良い機会だと思います」、F「現実のものと自分がしたいこと、やりたいことなどの空想とおりませで考えることも描くことと同時にいうことを学びました」、G 記入なし、H「教科書のお手本をみたとき低学年の想像力におどろいた。今の自分では考えもしないことを低学年のうちやることで高学年になってためになるのではないかと考え、保育者になったとき対象の年齢にあわせた絵の題をだせるようになれたらいいなと思った。今回やったことは全部役にたったと思う」

⑥の回答の分類である。「知識及び技能」はA、C、H、「思考力、判断力、表現力等」は、F、「学びに向かう力、人間性等」は、B、D、E、H、となった。この場合の「知識及び技能」は、保育者としてどんな知識や技能を持っているか、ということに、「思考力、判断力、表現力等」は、保育者としてその知識や技能をどう使うか、ということに、「学びに向かう力、人間性等」は、保育者として、どのように子どもや社会と関わり、保育者としてよりよい人生を送るか、ということに読み直してみる。そうすると、学生の立場でありながら保育者とのような視点で回答していることに気づく。ただ、ここで学生がいう「子ども達の気持ちになってアドバイスすること」、「対象の年齢にあわせた絵の題をだせる」ことも、保育者としては当然するべきことだ。学生である現在において、保育者としての基本的な姿勢に思い至ったことは、確かによいことだろう。しかし、小学生の各学年がどのような絵を描いているか知らない保育者は少なくないだろうから、この質問の場合は、知識及び技能を獲得したと回答した学生の方が収穫を意識できていたのかもしれない。

⑦ 「みんなの紙芝居発表を聞いた感想を教えてください」

A「みんな自己紹介と絵がぴったりあっていきやすかった。自分のかいた絵を紙芝居にするのはむずかしかった」、B「みんな、とてもキレイな絵を描くなぁーと感じました。色がとてもキレイだし、全体的にまとまっていた。紙芝居の発表は、もう少し笑顔でできるといいと思います。自分も、笑顔作りが下手なので、がんばります」、C「みんな紹介の仕方が上手だなと思いました。絵も上手ですごかったです。私は緊張をしまい少しつまったところもありましたが、他はマシだなと感じました」、D「皆の発表を聞いて考え方は人それぞれだなと思いました。皆に比べて私は文が短く、絵を変えるのが早いので、園児も混乱してしまうし、絵も見てもらえないなど反省点も見つかりました。もっとゆっくり話して、前を見て園児のことを考えて進められるようになりたいです。また、紙芝居の持ち方も研究したいと感じました」、E「みんなの発表はとてもレベルが高くて、説明の仕方がとても上手でした。私も次の発表までにおもしろくて分かりやすい発表ができるようになります！」、F「自分が描いた絵を通して〇〇が好き、〇〇をしてみたい、行ってみたいなど、様々な言葉に言い換えて自己紹介していたので、こういう言い方や表現のしかたがあるんだと、とても勉強になりました」、G「みんな上手に表現できてたし、絵も上手でびっくりした。園児にプリキュア伝わればいいなぁ」、H「他の人の小さい頃の自分をみれたり、同じお題でやっていたと思えない発想の絵とストーリーがみれてよかった。いろいろな絵をみれて楽しめた」

⑦の回答の分類である。「知識及び技能」なし、「思考力、判断力、表現力等」は、A、B、C、D、E、F、G、H、「学びに向かう力、人間性等」は、B、D、Eとなった。実際に自分が人前に立って発表したので、それぞれの学生は、いろいろなことを感じたようだ。全般的に、友達の紙芝居発表を好意的に受け止め、自分の今後の発表に活かしていきたいという姿勢がみられた。

⑧ 「この制作をして何がよかったか。していない時の自分と比較して答えて下さい」

A「子どもの発想力を学んだ。広がった。子どもの目線になって描くことができた」、B「1枚1枚、テーマに沿って描いたものも、一つの紙芝居として物語をつけてみると、バラバラなものも、一つになるんだと分かりました」、C「自分が思ったものを思ったまま描けるところがよかったし、色もたくさんつけられるところがよかった。細かいところを気にせず描けた」、D「6枚を一気に描くことでアイデアを振り絞ることができ、子どもの頃どんな絵を描いていたかを思い出すことができた。描いていなければ思い出せなかったと思うし、この作品があるのとないのではこれらの役の立ち方によって変わってくると思う」、E「子どもたちの気持ちになって絵を作成することができたので、自分が子どもたちにテーマを出す側になった時に子どもたちがどのようなテーマだと自分を引き出せるようなものが描けるか、意識することができそうな良い機会だった」、F「今まで美術などの時間に絵を描く時よりも、ねらいや筆の使い方、色の使い方、絵の具の使い方などをより意識し、頭の中で描くものを整理した上で描くと共に、小学生が描くので今回は絵を描いたのでより自由に、楽しく創作することができました」、G「各学年ごと、テーマにそって自由に思うがままに描けたことが楽しかった」、H「好きなものを描いたり想像するのが楽しかったので良かったと思う（今では想像しないことだったから）。何を描くか考えるのが楽しかった。現実的に起こることを今描いているが、小学生の絵は非現実的なので…」

⑧の回答の分類である。「知識及び技能」は、F、「思考力、判断力、表現力等」は、B、C、D、F、G、H、「学びに向かう力、人間性等」は、A、D、E、Fとなった。ここでは、思ったものを思ったまま描ける、子どもたちの気持ちになって絵を作成することができた、という感想が多かった。それはつまり、保育内容（表現・造形）の授業では、図工の時間のように自由に絵を描けていなかったということだ。保育者養成校の造形の授業は、自由に作品を作る授業ではない。子どもたちの造形活動を豊かにするために学ぶ授業だ。そのためには、保育者自身が楽しむことも必要にはなってくるだろう。そういう意味では、絵を描くことが好きな学生が、絵を描くことが中心の活動に取り組んだわけだ。自分の興味のある分野でこのようなことを学んでいくことは、あまり好きではない分野で学ぶことよりも発見が多いだろう。

⑨ 「この体験をどんな所に生かせそうですか？」

A「これから先生になった時、今回の絵の活動のように一つの絵を紙芝居にするなどの発想力を活かし、自分が子どもたちの前で何かをする時、一つのことを他のものと組み合わせるなどの、普通とは違ったことができれば良いなと思った。」、B「子どもへ何かテーマを投げる時にも、いつも自分がやってみる事で、子どもへの理解が深まると改めて感じました。限界を決めたり、結果を作らずに子どもと向き合う事で、その子らしさよりも感じられるのかなと思いました」、C「子どもたちがどういう表現をするかなど、表現の仕方や違いなどを知るために生かせると思う」、D「楽しいという感情を忘れずに制作することで生かすことができると感じた」、E「描く時も子どもの気持ちになって描いてみたり、紙芝居をする時も相手にどう伝えたら面白いのか、分かりやすいか考えながらやったので、想像力はとても身についたし。子どもの気持ちに寄り添った活動ができたと思います」、F「子どもたちの絵を見て、年齢や個人差による発達段階の違いに、より意識した上で子どもたちの絵を見ることができるようになったと思いました」、G「実際、保育の現場に立ち、このような活動をすることによって、一人ひとりの個性を見ることができ、良い所がわかる。子どもの想像力にこたえられる人になれる気がする」、H「今回は、個人で絵を描いて紙芝居をつくったけど、これを複数人でやったらグループの活動とかにも活かせるのではないかと考えた」

⑨の回答の分類である。「知識及び技能」は、C、「思考力、判断力、表現力等」は、A、F、H、「学びに向かう力、人間性等」は、B、D、E、Gとなった。Aのいう、一つのことを他のものと組み合わせる、という発想は表現ともいえるが、知識として扱うこともできる。それをどちらに分類するかは、選ぶ側の姿勢にもよるだろう。知識としてそういう手法を知っておくことで子どもの表現の幅は広がるだろうが、技法を便利に使っているだけだと生き生きとした活動にはならなくなる。ここは、この技法ができるという視点ではなく、この技法をこう使うという視点で分類した。今回は個人でつくったけれど同じことをグループでの活動でもいかせるのではないかと、Hが言っていることは、まさにこの技法をこう使うという視点だ。

今回の活動で学生に最も感じて欲しかったのは、Bのいう「子どもへ何かテーマを投げる時に

も、いつも自分がやってみる事で、子どもへの理解が深まると改めて感じました」ということだったのかもしれない。いろいろなことを自分一人でするわけではないが、できそうなことでも実際に行動しないことがあるのではないかと考えるからだ。学生達は、この活動を行ったからこそこれらの質問に答えられている。

ところで、この図画紙芝居プログラムは、小学校の図画で描く題材に取り組み、体感する活動である。小学生の発達段階に応じた絵の成長というのを感じ取れるだろう。しかし、一方で幼児の絵について再発見をしてほしいとも考えている。無藤隆は、幼児の絵は一回限りのその時に描いたという特質を強く持っており、小学校高学年とか中学の絵は、すごく上手だと思うが、絵の面白さでみると幼児の方がはるかに面白い⁽¹³⁾という。その説明として、「一回きりの行為と残っていくものとの関係というものが見えてくるからだ⁽¹⁴⁾」と述べている。

美術評論家の榎木野衣は、手が小さく、握力が乏しく、筆記用具の握り方も、紙への力の掛け方も非常に不安定な子どもが描く線は大人にはどうしても真似ができない。微妙に濃さや折れ具合や早さが変わる線は、単純なようで恐ろしく複雑⁽¹⁵⁾であるという。そして「絶対に変えることができない身体的な特性から、大人では計り知れない細部を持つ絵になっている⁽¹⁶⁾」ところが、子どもの絵のよさにつながっていると説明する。子どもの絵のよさは、心情的な側面で語られることも多いが、榎木が話すように身体的な制約が表現の豊かさを生んでいることは確かだろう。そういうことを考えてもらうためには、学生達に幼児の絵のよさを認識してもらうための質問も必要だったかもしれない。

2. 感想全体の考察

各学生の回答を3つに分類したのだが、「知識及び技能」を知、「思考力、判断力、表現力等」を思、「学びに向かう力、人間性等」を学、と表記すると、

Aは、知・思・思・知・思・学・思、	Bは、学・学・知学・学・思学・思・学
Cは、思・知・学・知・思・思・知	Dは、思・知・思学・学・思学・思学・学
Eは、学・知・学・学・思学・学・学	Fは、知・知・学・思・思・知思学・思
Gは、思・思・学・思・思・学	Hは、思・知・学・知学・知・思・思

というように分類された。

一つの回答に複数の要素があると認識したのは、B, D, E, F, Hである。これらの学生は、問いに対して複数の視点を持っていることから、バランスのよい学び方をしていた可能性が高いと推察される。しかし、「学びに向かう力、人間性等」の回答でみると7回の質問の中で、Aは1回、Bは5回、Cは1回、Dは5回、Eは6回、Fは2回、Gは1回、Hは2回回答している。こちらの分類方法の影響があるかもしれないが、A, C, Gの1回は少ないと思える。この活動

を保育者になる学生としてではなく、絵の好きな学生として取り組んでいたのだろう。それが悪いというのではない。導入の方法や活動の進め方など、もう少し保育者としての学びに向かう力を育めるようなプログラムに改善するための余地があると、3人の学生が教えてくれているのかもしれない。

Ⅵ おわりに

この図画紙芝居プログラムにおいて、保育者になる学生が保幼小連携を意識するためのポイントとはどのようなものか。まずは、学生が小学生の絵を教科書で見て、実際に描き、その体験を言葉にしたという点であろう。どこかにポイントがあるというより、見て、体験して、言葉にする、が合わさること自体がポイントだった。

では、どのような力が身についたのだろうか。まずは、保育者になる学生として、各学年の小学生が描く絵が、発達段階に応じて変化していくのだということを知識として知ったことだ。そして、そのような絵を小学生以上の技能で表現することができるようになった。また、今後保育者になった時には、子どもに寄り添った理解ができると多くの学生が実感していた。子どもと関わる際に想像力を働かせて接することができるということである。

今後の課題として、社会と関わり保育者としてよりよい人生を送るために、その想像力をどう生かしていくのかを考えることがあげられる。しかし、想像力を伸ばしていくことを言語化することは非常に難しい。身につけさせたいものに思考力、判断力、表現力は入っても、想像力は入っていない。一前春子は、「教育の連続性を保つ上で保育士・幼稚園教諭と小学校教諭が互いの保育・教育を理解していくことが重要」であり、「保幼小合同研修会やカリキュラム開発などが相互理解の生じる場として機能していることが示唆された⁽¹⁷⁾」という。もし、この図画紙芝居プログラムのようなものが保幼小合同研修会で行われるとするならどうだろうか。雰囲気や和らぎ、先生同士が話しやすくなり、子どものことを深く話せるのではないか。今度は、本研究で想像した具体的なことを少しずつ形にしていきたいと考えている。

謝辞

本研究に参加し作品掲載・作品文掲載など色々と協力してくれた、17C 木谷ゼミのみなさんに心より感謝します。

《註》

- (1) 木谷安憲, 2017, 「保育者になる学生が小学校各学年の図工教科書の図画を描く——保幼小連携を考えるきっかけとなるプログラム——」, 『川口短大紀要第31号』, pp. 93-105
- (2) 鷺田清一, 2005, 『想像のレッスン』, NTT出版, p. 32

- (3) 同上書, p. 29
- (4) 下村健一, 2017, 『想像力のスイッチを入れよう』, 講談社, pp. 8-10
- (5) エリ・エス・ヴィゴツキー, 広瀬信雄訳, 2002, 新訳『子供の想像力と創造』, 新読書社, p. 21
- (6) 内田伸子, 1994, 『想像力』, 講談社, p. 240
- (7) 同上書, pp. 240-241
- (8) 同上書, p. 241
- (9) 辻政博, 2003, 『子どもの絵の発達過程——全心的活動から視覚的統合へ』, 日本文教出版, p. 66
- (10) 同上書, p. 81
- (11) 天形健, 2010, 「第7章 図画工作の授業 2. 絵に表す」, 『小学校 図画工作の指導』, 建帛社, p. 105
- (12) 同上書, p. 106
- (13) 無藤隆, 2013, 『幼児教育のデザイン 保育の生態学』, 東京大学出版会, p. 161
- (14) 同上書, p. 162
- (15) 榎木野衣, 2018, 『感性は感動しない 美術の見方, 批評の作法』, 世界思想社, p. 26
- (16) 同上書, p. 27
- (17) 一前春子, 2017, 「第10章 考察」, 『保幼小連携体制の形成過程』, 風間書房, p. 238

参考文献

- 文部科学省, 2008, 『小学校学習指導要領解説 図画工作編』, 日本文教出版
- 小学校図画工作教科書(平成28年度)『ずがこうさく1・2年上 わくわくするね』, 『ずがこうさく1・2年下 みんなおいでよ』, 『図画工作3・4年上 できたらいいな』, 『図画工作3・4年下 思いをこめて』, 『図画工作5・6年上 心をつないで』, 『図画工作5・6年下 ゆめを広げて』, 開隆堂出版
- 大宮勇雄, 川田学, 近藤幹生, 島本一男(編集), 2017, 『どう変わる? 何が課題? 現場の視点で新要領・指針を考えあう』

(提出日 2018年9月28日)